

長生咒



大門口



見下

序

友人戀川春町が作りし楠無益委記をよみつゝとろくゝとまどろみし夢のうちに彼人皇三萬三千三百三十三代にあたりて、いやましに治れる御代のさまを見侍りしが、無益委記の趣に少しも違ふ事なし。而てかの卷に漏たる事をひろひあげて、又小冊とし、あはれ長生してかゝる事をまさに見たしと思ふより、とりあへず長生見度記と題して

序

友人玄川者町々作り一冊無益筆記と
いふつと俗くともぐろく一夏のうらふ
彼人皇之万二千三百三十三代ありく
いふまゝ一治ある御代乃て後と見ゆり
無益筆記の趣さるも違ふや
而くは地巻小編する事とわく
わけく又小冊一冊あり長生とわく
事とまゐる見ゆりと思ふとそ
長生見度記と題し喜三三書



正月の三つある歳にて娘の子はね々様のべを五つ縫つて下されといひれば息子はか々様長い話をして聞かせなとせがむ
 隣の子まで来ておばさん摘草に連れておいで、とかねて言ひのべたる未進を一度に催促される、
 「それでも正



月の三つあ
る時といふ
約束だもの
を。」
「ア、もう氣
上りがする
やうだ、正
月の五つあ
る時まで待
ちや。」



三年のうちに
彼岸に當る者
は定業、當ら
ぬは非業の死
といへども、
與一兵衛も勘
平も其年の八
月彼岸に當り
ければ、これ
も噓に極まり
しが、今では
大きに心得ち
がへて、三年
の内に當る人
は上戸、當ら
ぬは下戸と覺
えたるをか
し。
彼岸には必ず



天氣惡しく、
別けて中日荒
れとて大に荒
れる、其時米
の相場狂ふ。
明日が中日な
らばおらが内
も凶悪でもか
はずはなるま
い。」
雨やめたい佛
南無雨たひ屈
此降にはひが
んとも致し方
が御座りませ
ぬ。」
どうしても彼岸
のしるして悪
いお日利て御
座ります。」



女の奉公人切きり
米男まいより高し

「おはりかへ

し物は御指

南を得ませ

う。お切米

は五兩三分

戴きたる御

座います。

一去年から風

た所には千

供衆でも有

つたのか

一若旦那様と

お銀様か徒

座りました

女のまゝ人切な
男よりさし

きよきうく 丹の赤
ふじも 花を
まゝのち

あまうり
おはなさんと

松本

一切衆生

六五三

子

二五

己のくちを
おたふさぐ



「おらが五六
 兩も切米を
 とればとう
 に折介も止
 めてしまふ。
 さりととは女
 中衆は羨し
 5。」

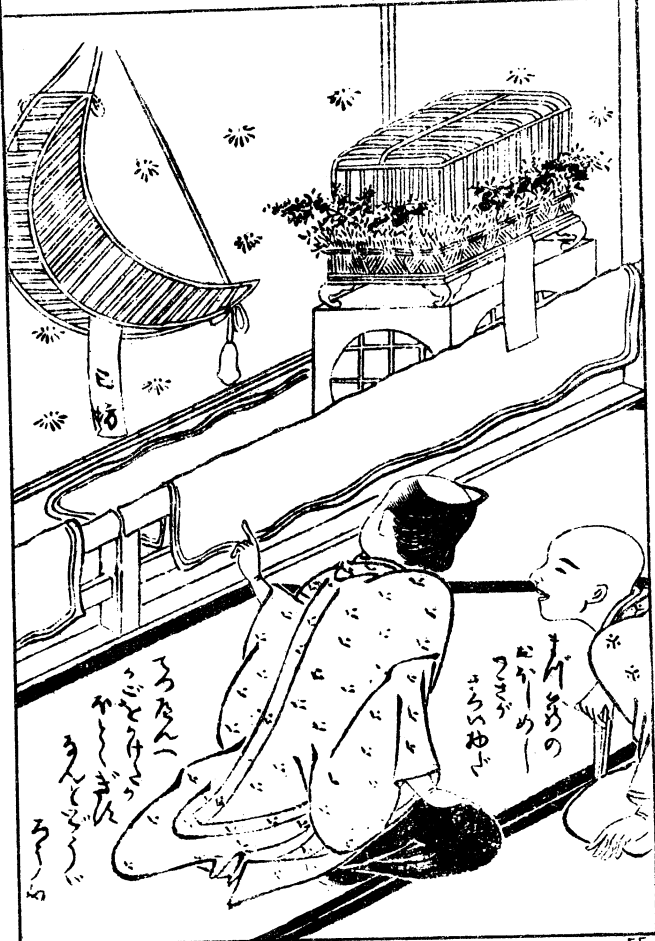


おろ
 五六
 きり
 とい
 止て
 女中
 衆は

ほととぎすの
會あり。
昔は時鳥とい
ふものは山に
ばかり有つた
物と見えて、
古歌にはとか
く山時鳥と詠
んで御座りま
す山では食物
に困りさうな
事の。
「さう飲んで
はへどとぎ
すさ。」



「まづ籠の思
召附がきつ
い物だ。」
「天邊へ籠を
かけたか時
鳥、なんと
どうだらう
か。」



角力があると
兎角雨が降る
故、雨のもら
ぬやうに芝居
をたて雨天三
十日興行する
「角力」は入梅
内の事さ。
今度の地蔵
が嶽は小さ
な男だが轉
ばぬ奴だ。」

毎カハア
西
今
北
ち
お
お
お

大正
九年

毎力あると
 病やふく
 りぬけ
 と
 廿二日
 再々
 する

職を座敷へ飾
る。

「柏餅でも黒
酒でも上り
ませ。」

「妹めがいち
りたがるに
は困ります。

「昔は粽とい
ふものが有
つたげに御
座りますか
話で聞いて
は野暮なも
のさ。」

のけうとたあへ
うさけ
うま
うま



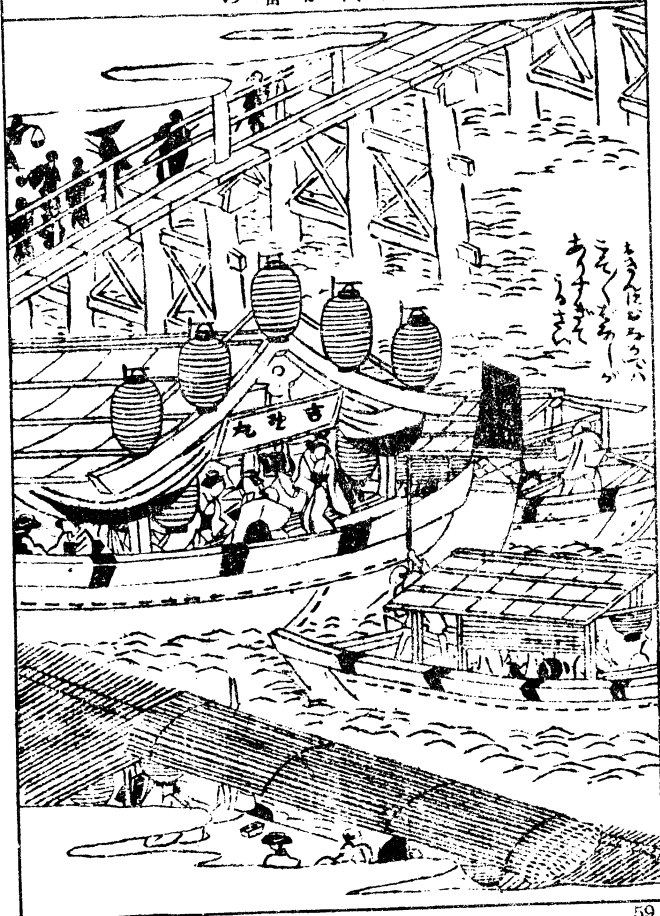
「惠美須屋の舟はこれかな。」

「ふる富とお直なほはないか
つんぼう。」

「おきんにお仲ではこそ
こそ話があ



り過ぎてう
るさい。」
「おてつにし
ろく。」
けんばんたる
後朝中流にと
どまる、何か
堅い事を言出
した、艾屋が
どうして見番
舟にいるもの
だ。



高輪の海手、
新地出来て高
輪の茶屋兩側
となり、向が
岡おかえて暑がる。

「高輪茶屋の
歸るさにど
うだ有難い
か。」

「椎の木三本
と付けねば
請取られぬ。」



「廿六夜様を
拜みに今年
は神奈川の
臺へ行きま
せう。」



—

[illegible]

七夕の短冊を百枚十文づゝにて書いて渡す。紙捻を添へて穴も開けてよこすのを紙捻を通して渡すのが三百枚通して五文づゝ。短冊竹へ色々の紙へ歌まで書いて結びつけ繩まで添へて賣り歩く。

此短冊のたち^は厨は^は返^はしの^は手切^はになれども、白紙と違ひ、値にならぬ故、白紙を澤山に混ぜて簡略紙や、白ウ紙や



八月になれば
月見といふ物
をして、吉原
へ客の来る事
なし。十一日
頃より二十日
過迄は見世を
引いて休みな
り。
「月見といふ物
は何故喰ひ物
のないものだ
ね。」
「かう暇で居て
酒や肴がいっ
ものやうに有
るならさぞよ
からうね。」



深川邊の寺に
萩を植ゑ、萩
寺と名づけ、
客は座敷へ來
障子をたて込
め、萩の上風
を聞いて楽し
む。

「あの水にさ
かだち、さ
は／＼とい
ふ所がどう
もいへぬ。」

「此間に鹿寺
へ鹿を聞き
に参りませ
う。」



江戸芭蕉の縁三十三所程に雅えて、俳人參詣する、御發句といふ物に節をつけ唱へながら歩く「一番に牛イ馬アのヲ雪イ見イ嫁、いざさらば雪イ見にイ轉ぶヲ、とラコヲるヲまアで。三圍には其角縁とハふが出来て餘り照續きて作のために悪い時は百姓此嫁に雨を祈れば、忽ち雨降る。枕四ツにて拍子をとるながら、二人に



長生見度記

て祈る。其祝詞
に曰く。

「夕立や田をみ
めぐりの神なら
ば降らしやんせ
ぬは怨みぢやと、
あけ暮に思うて
暮らすえ。」

「三十三所歩く
はちつとうち
やす。秩父の
開帳のやうに
芭蕉塚を一つ
所へ片付けた
いね。」

「金通を誘つた
所が一日片
瀬へ立つたし
いつて来やし
た。日蓮の御
難へ行く位な
ら、今日江戸
を歩けばえと
さりとは俗な
奴だ。」



顔見世前紋看板
出る。

江戸

おやま
若女形
娘形
中島

三浦右衛門

敵役 岩井

半四郎

「天幸が揚巻に
介六は篠塚浦
右衛門、意休
は半四郎だと
いふ事だ。此
奴はきつと宜
からう。」



「兎角近年顔見世といふと介六をするの。春狂言の由良之助はさしづめ藤藏であらう。もし晋八にさせるか。」

「市川紋之介といふ道化は下りか。」

「あれは江戸から行つた大谷廣右衛門といつた若衆方のことさ。」

「あの火で干して居るのは土手だの、うらは波さ。」



大谷廣右衛門
大谷廣右衛門

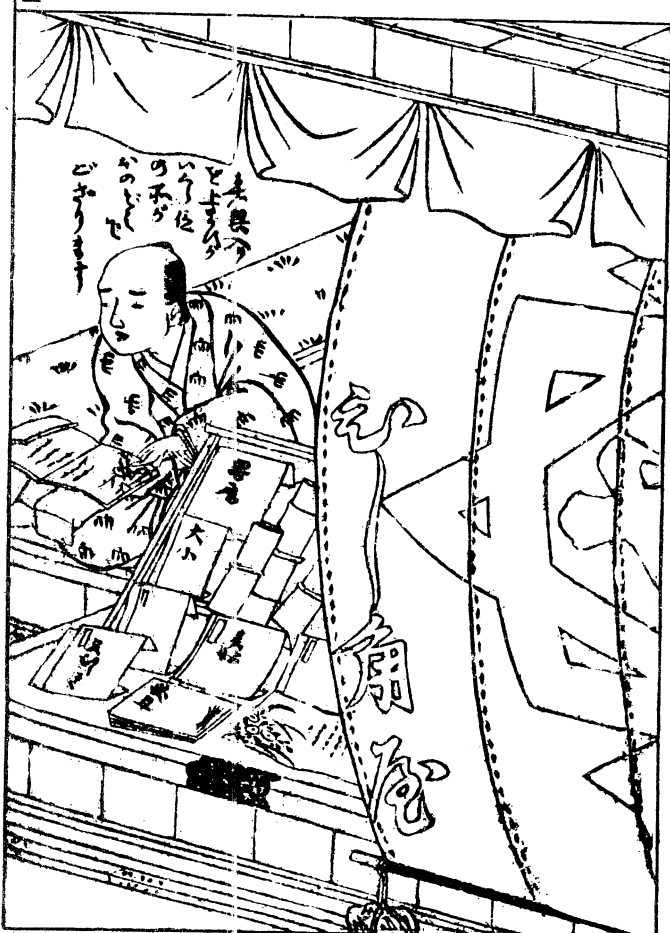
大谷廣右衛門
大谷廣右衛門

大谷廣右衛門
大谷廣右衛門



記度見生長

「春興入を
 上げますか、
 いくら位の
 所がお望み
 で御座りま
 す。」
 「こゝへ大小
 を百枚下さ
 れ、思附は
 悪くても廉
 いのがよい。」



「大小をかね
て、兩節は
値段が難し
からうの。」
「名開の刷物
は新板だの、
人のかへぬ
内、おらも
名をかへよ
うか知らぬ。」



顔見世切落しを
陳皮買歩く、尻
尾をつけて投げ
るなどはとんと
無い事。

「おこし、蜜柑」

「これ陳皮よ、

此處にもある

ぞ。」

「今此皮も賣る

ぞ。」

「蒟蒻の残も買

手があるとな

ゝ。」

「五文よこせ。」



「あて事もねえ
二文〜。」
「隣の入りと來
ては途方もな
い事さ、隣と
こつちとでは
陳皮ばかりも
十貫目から上
ちがふといふ。
お半長右衛門
この方の入り
だといひ
やす。」



昨夜渡船すべし
ふりきりて行く
ふりきりて行く
ふりきりて行く
ふりきりて行く
ふりきりて行く
ふりきりて行く
ふりきりて行く



此は、え
とく
とく
く
に福を
福を
今、
やう

篆書

健

徳川春町画

